



Title	経験の原理とP4Cポスターの変化
Author(s)	中川, 雅道
Citation	臨床哲学. 2016, 18, p. 43-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60599
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

経験の原理と P4C ポスターの変化

中川 雅道

はじめに

この論文の主題は、p4c¹を経験した生徒たちが、そして私自身がどのように変化しているのかということにある。ある実践を行うときに、その成果、価値ある成果とはどのようなものなのか。そういう問題意識のもとで、私は生徒たちが作成したポスターがどのように変わり、その変化は p4c の中で起こっていたどんなことに影響を受けているのかということについて考察を行った。そのような、経験の連続的な変化について考察するため、シカゴ大学附属小学校を創設し、自らの考えを実際に教育の文脈の中で実験し続けたジョン・デューイの考えをヒントにした。デューイは、経験の原理を連続性と相互作用という二つの観点から考察した。プラグマティストとして知られる彼が述べる「経験」という概念は必ずしも伝統的な経験概念と一致しているわけではない。あくまで彼が述べる経験は、生物がいかんして成長するのか、つまりは自身の実験学校で子どもたちがいかんして成長していくのかを考察する中で生み出されたものだ。そのようなものとしての経験、生物が成長するための経験について論じる中で、デューイはある子どもの変化に着目する。教師としてのデューイが見た、ある子どもの変容について考察し、その後、私の実践から生まれた変容がいかなるものなのかを論じてみたい。

経験とは何か？——それは連続する

私はここで p4c という学校における実践をいかんして評価するのかということを考えてみたい。評価という言葉を使うならば、すぐに成績評価ということが思い浮かぶであろうし、その意味での「評価」ということになれば無数の問題が付随することになる。数値的評価なのか、記述評価なのか。絶対評価なのか、相対評価なのか。教員による評価なのか、自己評価なのか。そういった様々な問題にはあえて踏み込まずに、少し異なった観点から評価ということを問題にしてみたいと考えている。実践を評価ということは、行

われた教育を検討しなおし、その場にいた個人を眺めなおし、実践する者の視線を新しい観点にずらすことで、実践そのものの新しい可能性を導き出すことである。その時、実践者自身が変化と成長の中へと巻き込まれることになる。すでに完了した古い実践を改めて眺め、新しい側面を見た実践者が行う次の実践は、その新しい観点が含まれた実践である。評価とは、そのような動的な視線の移動による、実践自身の刷新なのである。

デューイは、自らの実験学校での経験を踏まえて、経験を基礎にした教育について論じている。その中で、二つの原理、連続性と相互作用の原理を提示する。まずは連続の話から始めてみよう。『民主主義と教育』の中でデューイは、生物としての人間の特殊性に着目している。生物としての人間は幼児期に無能力である。それゆえ、人間は能力の可塑性を本質的に持っている。

それ（可塑性）は本質的には経験から学ぶ能力である。ある経験から、後の状況の困難に対処するのに役だつものを保持する力である（DE, 49）²。

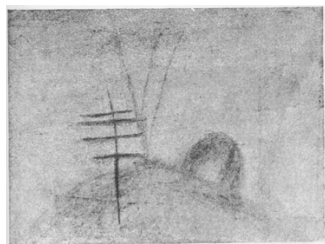
人類は他の動物とは異なり、完成したものとしては生まれない。赤子は社会的な可塑性を持っていて、赤子が成長するのは社会の中にいることによってである。社会の中で様々なことを経験することで、我々は成長に必要なものを学び取り、後の状況に対応するために成長する。経験は本質的に、前の経験から次の経験へと連続する。経験を基礎にした教育を構想するために問われねばならないことは、教育が行われているとして、そこで経験は連続しているかという問いかけである。デューイはさらに次のように語る。

人が自分自身だけで生きて、死ぬことがないように、経験もまたそれ自身だけで生き、そして死ぬことはない。欲望や意図からまったく独立して、すべての経験は、それに続くさらなる経験に生き続ける。それゆえ、経験に基づく教育の中心的な課題は、さらなる経験の内に豊穡に fruitfully、そして、創造的に creatively 生き続けるような現在の経験の質を選ぶことである（EE, 13）。

私たちのような教える者の課題とは、経験の質を眺め、その経験が後の経験へと、どのように豊かに、そして創造的に連続していくのかを考えることにある。

洞窟の絵と森の絵

続けよう。それでは、どのようにして経験の質について考え、その経験が続く経験へと連続していると考えなのか。この問いに対しては、無数の答えがある。授業の中で話されたことを文字に起こし、何が起きていたのかを追うこと。授業で用いたワークシートの断片を拾い集めながら、連続の可能性を探ること。あるいは、生徒に直接尋ねてみてもいいかもしれない。あなたは、どんな経験をして、それが後のどんな経験へとつながったのか、と。ここでは、デューイ自身が報告している、ある典型的な例について論じてみたい。それは小学生が描いた一枚の絵だった。



子どもが生まれもった別の天分には、鉛筆と紙を使うことがある。すべての子どもは形と色という手段を使って自分を表現することが好きだ。あなたがもし絵を漠然と書き続けさせて、ただ単に、この興味を勝手にさせておくなら、偶然に起こる成長以上のものはないだろう。しかし、最初に子どもの衝動を表現させて、その後に、批判したり、質問したり、示唆することによって、

いったい自分が何をしていたのか、そしてなにを求めていたのかを自覚させるなら、結果は全く別になる。例えば、ここに7才の子どもの作品がある。この作品は平凡なものではなく、小さい子どもの作品としては最もすばらしい。しかし、この作品は私が語ろうとしているある原理の例示になる。子どもたちは、人間が洞窟に暮らしていた時代の社会生活の原始的状況について話していた。この子が考えたことは、次のように表現されている。洞窟は岡の斜面にきちんと置かれている、もちろんありえない形で。子ども時代に特有の木があることも分かるだろう——垂直な線に水平の枝がどちらの側にもついている (SS, 27-28)。

デューイはこの小学生による洞窟と木の絵を、指導の可能性とともに想起する。まずは、その子が持っている自然の衝動を利用して、絵を描かせる。そこで描かれたのがこの作品である。そして、この作品に対して、指導者は関わりを持つ。気になったところを尋ねることによって。「本当にこんな風に洞窟は丘の上に立ってるんだろうか?」「木って本当に

こんなかたちだったかな？」いくつかのやりとりによって、導きの先を少しだけ見えるようにする。

ところで、子ども時代に特有の木の絵、ありえない洞窟は何を表現しているというのだろうか。それは、見る経験の黙殺である。私たちは非常に多くの場合に、見えているふりをしている。実は私たちは見ているようで、何も見ていない。考えられた木、考えられた洞窟をせっせと写し取っているのだ³。常にしばしば私たちは、見えているものを見損ない、見えていると信じているにすぎないものを表現することによって、見えているふりをする。この一枚の絵が、私たちに提起するのは単なる絵画的な表現技法ではなく、ある認識の問題、世界の現れ方の認識の問題なのである。

もしもこの子が、来る日も来る日もこういったことを続けさせられるなら、その天分を磨き上げることよりも、ただ打ち興じるだけになってしまうだろう。しかし、その子がここで、もっと細かく木々を見て、今眺めた木々と自分が描いた木を比べ、自分の作品の状況をもっと細かく、もっと意識的に検分する。すると、その子は観察によって木々を描くことになる(SS, 28)⁴。

ここで子どもは目を見開く。デューイは、子どもが観察によって木を眺めることを学び、それによって木々を細かく観察することになった経緯を説明している。しかし、本当に子どもは木々を実際に観察して描くことを学んだだけなのだろうか。ここでは、ある衝動によってなされた経験と、指導者による介入という経験、そして新しい絵が描かれるようになった経験との間に連続性が生まれている。つまり、指導という問題意識でこのテキストを読むならば、うまく指導するとは、うまく経験の間の連続性を見て取り、新しい道を示すことなのだ。しかし、まだそれでも論じ足りないことがある。

最終的にその子はもう一度、観察と記憶、そして想像を駆使して絵を描いた。再度、自分の想像的な思考を表現する、自由なイラストを描いたわけだ。しかし、今度は実際の木々の詳細な研究によってコントロールされて。その結果は、森のいくつかの木を表している場面になった。そのように展開していく中で、私にはこの作品が大人の



作品に匹敵するような詩的な感覚 poetic feeling を持っているように思えた。同時に、その木々の形は単なるシンボルではなく、ありうるものになった (SS, 28-29)。

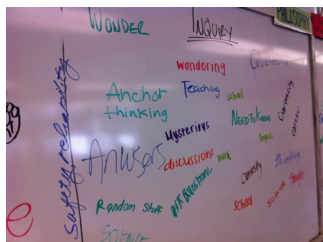
観察によって描くことを学んだというのであるなら、デューイの言葉を借りて述べると「詩的な感覚」の源泉がどこにあるのかが説明されない。私たちが二枚目の絵を見ることで、胸を打たれるとしたら、その詩的な認識、そして詩的な世界認識にある。「社会生活の原始性を描くのに、この子は中央に散歩する人物を配置し、新しい詩を得た」とデューイが賞賛している。

この子は、連続する経験によって、ある認識に至った。木を、自然のままに描くという認識と、それらの木々が詩になるという認識。見る経験という意味ではより正確に世界を眺めるようになり、原始生活の詩的な認識という意味ではより良く世界を眺めるようになった。大人に匹敵する詩的な感覚を、この子が持つようになったとデューイが評価していることを見逃してはならない。この後、このテキストの中で、デューイは詩を論じない。重要なのは、このテキストがデューイ自らのシカゴ大学附属実験学校で行われている教育について報告しようとした講演であったということだ⁵。私の仮説は次のようなものである。経験の原理として、一般的な言葉で定式化しようとしていた原理の生き生きとした具体的な姿を、この子どもの中に、デューイが発見した。そして、そのことを大人に匹敵する詩的な感覚と褒め称え、実験学校の有意義な成果として報告しようとした。教員は、そのような形で、自分の行っている教育の成果を公表し、成果として評価してもらおうとするものだ。

この報告のプロセスの中で、デューイ自身も評価者として、自分の原理の具体的な姿を発見した者として、世界を眺める目に変化している。「適切な指導のもとでなら、人間の原始生活についての認識は変化し、経験の原則に適って人は成長する」ことを具体的な経験から確信した者として。「詩的な感覚」という言葉はその具体性への賞賛であると同時に、教育の一般的な原理にとっての、ひび割れである。その子が、そこに存在したという特殊性によって、あるいは、その子がそのように変化したという特殊性によって、経験の連続という説明原理は、すでに越えられてしまっている。

カイルア高校での授業：P4C ポスター

毎年、1年間のP4Cのふり返り、総まとめとしてポスターを作成することになっている。一人一枚書いてもらうわけだが「これまでのP4Cをすべて思い出して一枚のポスターにしてください」と指示しても、作品を一人で作り上げるのは難しい。ハワイのカイルア高校で行われていた授業を参考にして、ポスターにするまでのステップとして、いくつかの補助的な授業を行っている。次の写真はカイルア高校で行われていたホワイトボードの写真である⁶。



- ① P4Cで鍵になる概念を提示する。哲学、探求、反省、コミュニティ、考える、話す、聞くなど。
- ② その言葉から連想する言葉を、それぞれの生徒が考える。
- ③ 思いついた言葉をホワイトボードに書いてもらう。探求の場合には、神秘的、不思議に思うこと、答え、興味、知ろうとすること、など。
- ④ 自分が考えた言葉、クラスメートが考えた言葉を使って「この授業は……」という文章を考えてもらう。
- ⑤ それをポスターで表現する。

こういった補助的な手段を用いて、これまで行ってきたP4Cの議論を新しい言葉によって想起させることで、経験の変容を迫るわけである。このプロセスを行うことによって、何を書いたらいいかわからないという生徒の数をかなり減らすことができる。

さて、ここからは、神戸大学附属中等で私といっしょに2年間（中学校2年、3年）P4Cの経験を積んだ生徒たちの作品を見てみたい。1年目と2年目のポスターにどういった変化が起きているかを見ることで、彼／彼女たちがどんな経験の更新を経験したのかが分かるはずである。

まずは、ある女の子が描いたポスターから見てみよう。ポスターの横につけられているのは、本人によるポスター解説である。



このポスターでは「P4C をすることによって今まで自分にはなかった新しい視点が拓ける」ということを表そうとしました。中心にいる女の子が手に持っている虫めがね、それが私の思う P4C です。例えば、1つのものに着目して、こんな見え方もあるんだ！と気づけたり、こんな所も見えるんだ！と思えたり、とにかく新しい“気づき”が多い授業なのではないでしょうか。

知っている答えとは別の答えもあるらしい。中心に描かれた少女からは見えないところで、木が笑い、雲がコンセントにつながっている。道の脇に生えた草の中には機械が見えている。P4C は虫眼鏡で、自分には隠されている、新しい世界を発見させてくれるものだ。これが最初に紙とペンを渡され、表現の欲求に身を任せたときに彼女が描いた像である。この作品自体が、1 年間で経験した様々な対話の中で、彼女が今まで考えもしなかった事柄を別の視点で、あるいは拡大して見始めたことが分かる。しかし、別の答えもあるらしい。まだ、伝聞形である。それでは、翌年にはどうなったのか。

p4c は様々な人の多種多様な意見が混ざり合い一つの議論となっている。それは一見すると混沌としているようにも思えるが、ひとつひとつの考え方や意見は特徴や特長が異なり、なおかつ輝く星のように尊く美しい物しかないように思えてならない。p4c はそんな宇宙のような世界が見えるようにできている不思議な扉だと考えられるのではないだろうか。



私がこのポスターを見て、まず感じたことは自分が宇宙の中に引きずりこまれそうだということだった。そこから、ふと思う。多くのポスターの変化の中で、特徴的なことの一つに人称の変化、視点の変化ということがある。この二枚目のポスターは、見る者の側から描かれている。それに対して、昨年度のポスターは、三人称的に描かれており、ポスターの中の女の子が発見しているというものだった。答えもあるらしい、という伝聞から、直接自分が発見する世界へと変化したのだ。P4C で問われる問題や、そこで答えられる他の人たちの様々な考えが、美しく輝いていると感じられるほどに、自らの問題として引き受けることができるようになった。そして、そのことは無限の可能性へとつながっている。彼女はこのポスターの変化について、次のように語っている。

P4C を行った回数によるものなのではないか。手さぐり状態から始めて1年目には何もわからないまま、ただ単純に1人ひとりが思うように、ロジックもないままに発言していたけれど、2年目に入り、要領を得るようになってくると話し手は聞き手に納得してもらえるようなロジックを考えながら話すようになり、聞き手は話し手の発言内容から自分の考えとの相違点を自然と探せるようになったりと「慣れ」が生まれたことによって自分が何をしているのか、ということが明瞭になったことで、「P4C を説明する絵」に変化が生じたのだと思う。

彼女自身がふり返る変化は、自分の話す内容をただ口から出すのではなく、あるロジック、理由の説明、推論という形式での発話、反例を出すことで議論を展開させること……などを考えながら話すようになったことで、他の人たちの言葉が、つまり他の人たちの無限の世界が見えるようになり、輝き始めたことなのである。話すことによって、聴くことができるようになった。他の人たちの意見がより美しく見えるとしたら、それは十分に変化し、より良くなった世界である。

経験とは何か？——それは相互に作用する

ここで、デューイの提示した森の絵、そして P4C ポスターをさらに解釈するためにもう一つの原理である相互作用の原理についても論じておきたい。

『民主主義と教育』の中では個人と環境との関係について次のように論じられている。「教育とは個人 individual とその環境 environment との適応に影響するような習慣を獲得することにあると定義されることも珍しくない (DE, 51)」。人と環境が適応するような関係を築くことが教育である。しかし、その適応の在り方として述べられる習慣には二つの側面がある。受動的側面と能動的側面である。一般に「慣れ」としての習慣は受動的なものであると考えられがちである。「我々は自分たちの周囲の状況に——自分の衣服や靴や手袋に——慣れる。(DE, 51)」人は衣類を着ていることに慣れる。その意味での習慣はあくまで環境によって我々が支配されているだけである。それは「環境に従うこと (DE, 51)」に過ぎず、「日常の決まりきった習慣や、我々が支配するのではなく我々をとりこにってしまう習慣は、可塑性を減ぼす習慣である。それは変化する能力の終わりを表す (DE, 54)」。受動的な習慣が、受動的であると認識されることすらなくなった時に、成長や変化を阻碍する悪習へと姿を変える。

しかし、我々は単に衣服の慣れという習慣に居続けるだけではない。寒暖の変化によって衣替えをすることは単なる受動性だけを含んでいるわけではない。我々は環境の状態自体を変化させるような習慣を持つ。気温に対応できないので衣服をまとうわけだが、そのような衣服自体も我々にとっての環境へと変化し、外気が変わるとそれに即応して、衣替えとして環境が変更される。それが部屋にまで及ぶと、エアコンで温度を管理するようになる。そのように我々は環境を変化させる。

要するに順応とは、我々の活動を環境に順応させるのと全く同じように、環境を我々自身の活動に順応させることである (DE, 52)。

環境自身を変化させる契機を我々は持っている。このとき、我々の活動を環境に順応させつつも、環境のほうを我々の活動に向けて順応させるという、人と環境との相互性が生まれる。このようにして、相互性を生みつつ、我々は成長していくのである。

『経験と教育』の中では、さらにこのことが経験の特徴として考察されている。「すべて

本物の経験は、その経験が持たれた客観的な状況 situations をいくらか変えるという積極的な側面を持つ（EE, 22)」。まずは経験そのものが、その経験の状況に影響を与える。この説明は実は連続性の原理を受け入れることによって生じる。なぜなら、すべての経験は何らかの経験に接続されるのであるから、経験を形成する状況や、環境が生じる状況に影響を与えることになる。

連続性と相互作用という二つの原理は互いに別々のものではない。それらは互いに阻害し、また統一される。二つの原理はいわば、経験の縦糸と横糸である。異なった状況が互いの後に続く。しかし、連続性の原理によって、何かが先のものから後のものへと引き継がれる。人がある状況から別の状況へと移るときには、彼の世界 world は、つまり彼の環境 environment は拡大し、あるいは縮減する。彼は自分が別の世界に生きていて考えることはなく、唯一の、そして同じ世界の別の部分を生き、異なった側面を生きていて考える。彼がある状況のもとで知識や技術として学んだことは、それに続く状況を効果的に理解し、取り扱うための道具 instrument になる。このプロセスは、生きること、学ぶことが続く限り、続く（EE, 25-26)。

経験が環境に作用し、環境が経験に作用する。それが相互作用の原理である。ある経験によって世界が変化し、その世界ごとに変化するというプロセス自体が、後の世界解釈の道具になる。そういった相互作用は無限につづいていく。我々は生きる限り、我々が状況と見なすものと相互作用し、成長する。そういった動的な変化のプロセスが、慣れという意味での悪習を打ち砕き、積極的な意味での世界変革の道具、つまりは習慣となる。

デューイの洞窟の例の場合には、決まり切った単なる悪習とは、慣習的な絵や慣習的な洞穴の描き方ということになる。単に周囲の環境で行われているにすぎない慣習的な表現に、自身の絵画的表現が支配され、そういった環境に従っているだけなのである。しかし、二枚目の森の絵はどうだろうか。教員との質疑や、批判、示唆を得たことによって、記憶や観察を駆使して描くようになった。そのことによって彼の世界への見方が変化し、そのことによって彼の世界自体が変化している。また、そういった形で世界を眺めるようになった人は、常にその観察法を用いて世界を理解するようになる。そのような世界変革が起きている。

P4C ポスターにも同じ事が言える。初めは何が起きているか分からないながら、環境

に従おうとする。環境に従う中で慣れが生まれる。慣れの中で、環境を変えようとする動きが始まる。あるロジックに基づいて話そうとする。そのように環境を変えていく中で、世界のほうも変わっていく。周りで話されていること自体への理解が深まり、何が話されているのかが分かるようになる。その時、世界が全体として変化している。

さらなるポスターの話

さらに別のポスターについても考察してみよう。二年目になると絵がシンプルになる。そういう変化が多く見られた。



このポスターは P4C で行う議論の中のみんなの意見を表していて、生徒の想像力を絵に描き出したものです。例えば、一番上のハシゴは一つ一つのステップがみんなの考えを表していて、それぞれの意見にのってこの子が答えを見つけ出そうとしている場面を描いています。このように P4C ではたくさんの意見を踏まえて共通の考えを見つけ出そうとするのだと私は思います。

これは美しい想像力のデッサンである。頭から生えた木、その木は枯れている。枯れた木に孤独な姿でぶら下がる少女。歯車の機械的な運動と、そこから突き出された釣り竿からの魚釣り。機械から飛び立つのは、もっとも対照的であると思われるような鳥たちの自由な姿。それらを背景にはっすぐ上昇するはしごと、そこを昇る少年。これらすべての描像は、周りの人たちの話に耳を傾けながら、頭の中で起こっている運動である。さまざまな概念が、頭の中をかけめぐる。そういえば、このブランコにのっている少女のように孤独な女の子が、そのクラスにはいた。おそらく、その女の子の存在が気に掛かっていたのだろう。そしてまた、創造的な状態を描くこの作品のテーマは一人で考える孤独でもあるだろう。まだ、彼は一人で考えている。そして議論の目的はたくさんの意見の共通性を見つけることであった。翌年には次のような変化を見せた。

P4Cでは人々と共有をすることが一番大切なことだと思う。一人ひとりが考えていることは様々だ。また、個性的なものもたくさんあると思う。しかし、自分の考えてることを口に出さなかったら共有ということを達成することは出来ない。だから今回のポスターには口をたくさん描いた。使用した色は似ていても同じというものは一つも無い。それは一人ひとりのユニークな所を表している。



アンディ・ウォーホルを意識した作品。彼の意識は共有のほうへ動いた。おそらくは、充分に自分の意見を表現できなかったことへの反省なのかもしれない。彼は自分の作品を新しく出会った人たちとの出会いの中でふり返る。3年生になったときに、神戸大学附属中等教育学校の住吉校舎と明石校舎が、住吉のほうに一本化されることになり、違う場所で学んでいた人たちと出会ったという経緯があった。

明石生が住吉へ登校し始めた時、始めて「違う」というものを感じた。今までは住吉だけだったので考え方も一緒に自身の意見を口から出さなくても他の人がもう言うてくれているのがほとんどだった。しかし、あまり親しくない人とP4Cをした時に色々異なる意見があることに気づいた。ゆえに自分の考えを他人に知らせるためには口から言わないといけなさと感じて3年時のポスターを描いた。

異なる意見なら口に出さないといけない。わかり合えているなら、口に出さなくても良い。私たちは、そんな風に考えがちだ。ともあれ、カラフルな個性が、内にあるだけでなく、自分の外にもあることを発見した変化は非常に大きいものだ。

言葉少なに語ることの多い彼は一年目には話を聞き、自分の中で想像を働かせることで充分だった。P4Cの経験を繰り返し、別の校舎から来た人たちの、自分とは異なる意見を聞く経験が連続する中で、彼は少しずつだが積極的に周囲に働きかけ始めた。それが口

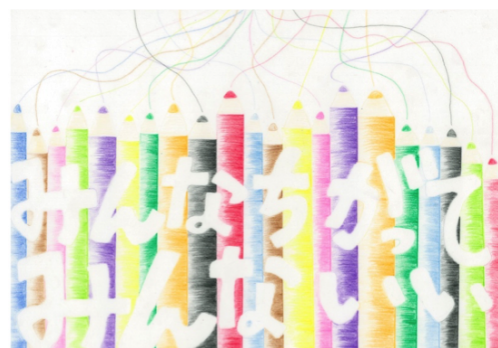
を開くという経験であり、彼は環境を自ら組み替え始めた。閉じられた経験から開かれた経験へ。

次の変化も興味深い。



P4C は一つの矛盾について永遠に話していくので、ウロボロスという永遠を表す絵を描き、矛盾を強調したかったので矛盾と書きました。矛盾自体も議論の中でちょっとずつずれていくので文字を傾けました。

矛盾とここで呼ばれているものは、彼女が P4C の中で感じた反対の意見という意味だろう。ある人は A と述べ、別の人は B と述べる。A と B が両立しないならばそれは、周りから見れば矛盾しているということになる。その矛盾が解決されないままに、永遠に論じられている。ただ、少しずつ論点が移り変わっていくので、角度が変わっていく。



P4C は全員の意見が尊重される。かねこみすずの「みんなちがってみんないい」という言葉があるから、ぴったりだと思ってこの言葉を書こうって思いました。色鉛筆にしたのは芯があって、人間に近い物を表せると思って、色鉛筆を不揃いにしているのは背が高い人もいたり、低い人もいたりっていうのを表現しようと思いました。色鉛筆

の先から色が出ていますが、みんなの考えが、色を持ってどんどん広がっていくことを表現しました。

翌年に描かれたのは、非常に肯定的な認識である。みんなちがってみんないいという詩人の言葉を頼りに、不揃いな色鉛筆が並べられている。そして、そのような色鉛筆から描かれる線は交わったり、離れたりしている。どこまでも続いていくと表現されていたものは、

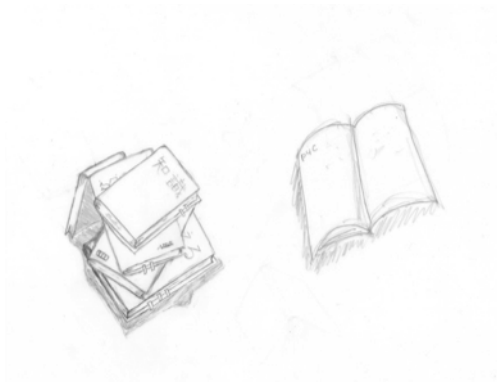
それぞれの個人の違いへと変わっている。この詩人の言葉はあまりにも凡庸に響くことがある。私は普段はこの言葉を好まない。しかし、このポスターを見たときに、私はこの言葉が表現されたその様に目を奪われた。彼女がこの言葉の正確な意味を理解していると知るに足る表現に驚かされたのだ。白抜き文字と、それを可視的にさせているのは淡い色合いの、背丈も太さも違う鉛筆たちなのである。そういった背景がなければこの文字は、この詩人の言葉は理解すらされないだろう。

また、彼女は自分の変化についてこんな風に語っている。

2年生の時は、議論を広く見て「矛盾について話し続ける」が大切だと思った。3年生では議論の中でどんな意見を出すのが、どんな意見「でもよい」と思った。回数を重ねたことで、少し知識も増え、議論が深まるようになった。知識がない人も、どんな意見でも出していくことが議論中で新しい考えをもたらすことになる。

つまり、問いについて、ずっと考えなければいけないことが大切なことだが、それを続けていくためには、それぞれの意見の違いや、個性を見なければいけないということだ。知識があれば議論がうまくいくというわけではなく、知識があることと知識がないことの違いそのものが議論を生む。どちらが優位であるというよりも、違いそのものが新しい考えをもたらす。しかし、それが「新しい」考えだと認めるためには、聞いている者が個性の違いを認識していなければならない。そういえば、彼女はいつも発言するというようなタイプではないが、回数を重ねる中で聞く姿勢や、聞いている時の目の輝きが少しずつ変化していった。彼女も、周りの世界を理解する手段として、この詩人の言葉を用いている。

もう一枚だけ、最後に見てみよう。



まず、積み上がっている本は知識のことを表しています。今の時代、情報がたくさん出回っているけど、本が一番信憑性が高いので本の形にしました。次に、空白のノートについて、議論を重ねていく中で埋まっていくと考えていて、議論を重ねる中で一人一人の反省が行われて、本に内容が詰まっていき、知識としてみんなの脳に蓄えられていきます。他の空白のスペースはその容量があるということです。

実はこのポスターは2年目のもの。シンプルで、議論の内容や、反省のプロセスに焦点を当てて本を描いたポスターだ。彼も劇的に変化したところがある。



P4Cは様々な事柄、差別、殺人、正義などといったテーマについて論じる廊下のようなものだ。そして、そのそれぞれの部屋には容量がない。彼は1年目にはそんな風に説明していた。それぞれが多くの論点を含んでいて終わりが無い。しかし、私が少しぞっとしたのは色彩のほうだ。これを見ていたクラスメートも、どちらかというと色のほうに目がいていた。このおどろおどろしい色が白一色に変化したことにはやはりそれなりの理由があ

る。彼はこんな風に話していた。

ポスターが単純化した。P4C で意見を誰にでも分かるように噛み砕くことを心がけるように。つまり、複雑な意見を単純化した。このことの反映。色が白に。皆の意見を聞いて、世の中悪いことだけではないなと思った。

自己表現に苦慮していた彼は、自分から扉を開くことで、周りの意見をも受け入れるようになった。P4C をすることで、世の中悪いことだけではないなと思うようになったら、とてつもない変化が起こっている。これらのポスターの完成度の高さに目を奪われるというだけではない。これらのポスターが世界をより良く見るようになった認識の証左であることが私を驚かせる。それはあくまで、P4C の中で日常の経験との連続性が生まれ、世界の見え方そのものが更新されたからなのだ。私たちは信念を変え、行動を変える。

変容と特殊

次のような疑問が出されるかもしれない。ここで選ばれたポスターは実践者が恣意的に選んだものではないか、と。確かに、ここで考察されたポスターは一部の生徒のものである⁷。恣意的な選び方であるという指摘は正しい。また、これまでに論じたことが P4C に加わった人たちすべての変化でないこと、つまりは、典型的な変化ではないこともまた正しい。ここで論じようとしたことは「一般的に P4C がどのような効果があるのか」という問いでもなければ、「P4C とはそもそもいかなる変容を生徒たちに生むのか」という問いでもない。デューイが引き合いに出した例もデューイという存在なしには説明できないのと同じように、教員としての私という存在なしにはいかなる変容も説明することなどできないだろう。また、私が生徒のポスターに行った解釈についても、あくまで私という視点から、何が見えるのかを語ったにすぎない。非常に限定的な解釈である。試みに思考実験として、そのような解釈を本人たちに説明したとしたら、本人たちは納得するだろうかと考えてみる。私がその人の存在を細かに観察していることは、その人を喜ばせるかもしれない。そんなはずはないと疑念を生むかもしれない。つまり、私のポスターへの見方が正しいというわけではないだろう。それでは、私は何を論じてきたのか。

実は、私をも含む変化のほうを今まで論じてきたのではないか。人々は私の目の前で変

わる。その時、私とその人はいずれも特殊な存在となる。その場で起こることは二度と再現することなどできない。その場で生じる変化、ポジティブなもの、そうでないものも私を驚かせ、私は少しだけ変わる。そんな風景も、心から素晴らしいと思う。しかし、ひとたび、その変化を見つけると、後から様々な光景が、P4Cの中でのその人の姿、あるいは日常生活の中での微細な変化が、私の目の前に繰り広げられる。私の経験は後から眺望を開き、人々の変化を遡って追憶することになる。そして、こう思う。次に議論をするときには、あの人にはこんなことを言ってみようか。P4Cが終わった後の空き時間にこんなことをコメントしてあげて、あんな雑談を試みようか。指導の可能性とは、質問や批判や示唆だけに留まらない。我々指導者が行うことは、すべての関わりの中で、自分の世界を変化させ、相手の世界を変化させ続けることなのだ。私が、論じ続けてきたことは、ありきたりの世界への^{ひび}割れによって、指導の在り方が、いかに変化するのかということだったのだ。誰かを評価したり、何かを評価するとは、そもそもそのようなものではなかっただろうか。

注

1. Philosophy for Children の略称。子どものための哲学。今回の論文では、なぜ p4c を行っているのかということについては論じない。私のこれまでの実践、記録、論文は P4C Japan のウェブサイトで見ることができる。そのいくつかの中で、p4c とはどのようなものなのか、なぜ p4c が必要なのかといったことを論じているからである。<http://p4c-japan.com>
2. 以下のデューイの著作からの引用はそれぞれ、SS は『学校と社会 The school and society』DE は『民主主義と教育 Democracy and Education』、EE は『経験と教育』の略称である。SS は John Dewey, *The middle works 1899-1924*, Vol. 1, Southern Illinois University Press, 1976、DE は John Dewey, *The middle works 1899-1924*, Vol. 9, Southern Illinois University Press, 1980、EE は John Dewey, *The Later Works 1925-1953*, Vol. 13, Southern Illinois University Press, 1988 のページ数を指示している。邦訳はそれぞれ、『学校と社会』市村尚久訳、講談社、1998 年、『民主主義と教育』金丸弘幸訳、玉川大学出版、1984 年、『経験と教育』市村尚久訳、講談社、2004 年を参考に訳出している。なお引用中の括弧は引用者による。
3. ここで、私たちがプラトンによる洞窟の比喩を思い描くことは、果たして不当なことだろうか。「人間

私たちはこの住まいの中で、子供のときからずっと手足も首も縛られたままなので、そこから動くこともできないし、また前のほうばかり見ていることになって、縛めのために頭をうしろへめぐることはできないのだ。彼らの上方はるかところに、火が燃えていて、その光が彼らのうしろから照らしている。……こうしてこのような囚人たちは……あらゆる面において、ただもっぱらさまざまな器物の影だけを、真実のものと認めることになるだろう」。(プラトン『国家(下)』藤沢令夫訳、岩波文庫、1979年、pp. 94-96)。洞窟という主題と、視覚をめぐるのものであることが単にこの話を想起させるだけなのかもしれないが。

4. いずれの画像も *The middle works 1899-1924* から取り込んでいる。
5. 「一八九九年四月、ジョン・デューイは、シカゴ大学附属小学校の父兄や関心ある人たちを前にして、三つの講演をおこなった。その附属小学校は、この講演の三年前に設立されたものである」(ジョン・デューイ『学校と社会 子どもとカリキュラム』市村尚久訳、講談社、1998年、p. 55の「原文テキストの刊行歴とこの版についての覚え書き」による)。原始生活の絵の変化は、講演の部分に含まれている。
6. ハワイの公立高校、カイルア高校で行われていた英語(日本でいうところの国語)の授業から大きな示唆を得た。以下のポスター作成は、同校の素晴らしいポスター作成の実践に依拠している。経験を絵で表現させるという発想は以前から私にもあったが、よりよい実践を見て大きく刺激された。カイルア高校ではp4cを積極的に取り入れて授業を行っている。最初は一人、二人の先生が行い始めたp4cが今では学校全体に広まっている。私が視察した2014年の段階では合衆国の助成を得て、philosophical inquiryという科目をsocial studiesの中に創設するという取り組みを行っていた。同校の校長は素晴らしい人物で、授業が終わったゆったりとした時間に、こんな話を聞いた。カイルア高校は、ちょうどオアフ島の山間に位置しているが、そこにはネイティブハワイアンたちのコミュニティがある。ただでさえ、人種が混交している(ちなみに私が試みにカイルア高校で生徒たちにoriginal nationalityを尋ねてみたところ、一人につき4カ国以上の名前がバラバラに出てきた)オアフ島では、人種間の相互への無理解による衝突も激しい。カイルア高校はp4cが始まる前は、教室から全生徒を強制的に退出させて丸一日学校を閉めなければならないほど、コミュニティ間の衝突が激しかった。p4cが始まり、人々が話すようになったことで少しずつそのような学校閉鎖はなくなっていき、いまでは平和な学校になっている。確かに、私が見た光景はのどかな自然にかこまれた静かな学校だった。
7. すべてのポスターではないが、この論文で言及しているよりも多くのポスターを本人の解説付きで掲載している。<https://www.facebook.com/p4c.japan/photos/a.830356963703663.1073741829.7309>

04856982208/830356993703660/?type=1&theater (2014 年度版)

https://www.facebook.com/p4c.japan/photos/?tab=album&album_id=1064207496985274 (2015
年度版)